

修士論文（要旨）
2014年1月

介護老人保健施設における介護福祉士の看取りに対する態度

指導 杉澤 秀博 教授

老年学研究科
老年学専攻
212J6008
中里 陽子

目 次

I. はじめに	1
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	1
II. 研究の目的と意義	1
III. 研究方法	1
1. 調査対象者	1
2. 調査方法	1
3. 分析方法	1
4. 倫理上の配慮	1
IV. 結果	1
V. 考察	2

参考文献

I. はじめに

団塊の世代が高齢者となり、2030年の年間死亡者数は160万人に達すると推計されている。このような本格的な「多死時代」が到来する中で、最期を迎える場所の確保が重要な課題となっている。少子高齢化、家族の多様化による生活環境の変化、介護力不足や介護負担などにより、在宅で最期を迎えることが困難となっている。他方、介護老人保健施設（以下、老健とする）で亡くなる割合は、1995年の0.2%から2010年には1.3%へと近年増加傾向にあり、さらに、2009年の介護報酬改定で「ターミナルケア加算」が新設されたことで、今後より一層、老健での看取りが多くなることが推測される。しかし、日常生活援助を主な役割としている介護職員は、看取りに直面し、どのように対応しているのだろうか。

老健と特養の介護職員を対象とした看取りにおける先行研究では、ほとんどが看取りに関する実態調査や看護・介護職員に対する態度に関しての量的調査である。小野ら、南部ら、深澤らによって介護職員の態度に関する質的研究は行われているものの、その態度がどのようなプロセスで形成されているのかを明らかにした研究はほとんどみられない。

本研究の目的は、看取り介護に取り組んでいる老健の介護職員を対象として、看取りに関わる過程で介護職員がどのような態度を持つのか、そのプロセスも含め明らかにすることである。本研究の意義は以下の2点にある。第1に、介護職員が看取りに関わる過程で直面する課題は何かを特定できる点であり、第2には、心理的な課題に対応した援助指針の作成に貢献できる点である。

II. 研究方法

1. 調査対象者

看取りを行っている老健の介護職員で、①介護福祉士の資格を持つ、②老健における経験年数が3年以上である、③看取りの経験があることの3条件に合致した介護福祉士11名である。

2. 調査方法

半構成的面接法を用いて個別面接を実施した。調査期間は2013年9月～10月である。

3. 分析方法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。分析テーマは、「老健の介護福祉士の看取りに対する態度」であり、分析焦点者は、「老健に勤務する看取り経験のある介護福祉士」とした。

4. 倫理上の配慮

桜美林大学倫理委員会の承認を得たうえで、必要な配慮を行った。

III. 結果

以下、[]は概念、【 】はサブカテゴリー、《 》はカテゴリーであることを示している。分析の結果、介護福祉士の看取りに対する態度に関するカテゴリーとして、《看取りの受け入れ》《老健施設の看取り体制への評価》《経験主義的なケアへの確信と不信》《有用感と不安の交錯》の4種類が生成された。

介護福祉士は、老健が在宅復帰を目指した中間施設であることを理解している一方で、看取りも含めて【老健で受けるしかない】という覚悟を持っていたことが明らかとなった。また、【確かなサポート体制】と【経験の中で培われた技能への自信】が、【ケアから得ら

れる有用感】を実感し、[寄り添うことができない人員体制]と【確信できない経験的なケア】が、【ケアへの不安】に結びついていた。

V. 考察

介護福祉士は、看取りは老健本来の役割ではないと思いつつも、利用者の家族の状況や他の介護保険施設のおかれた状況を[家族の状況から老健が受け皿となるしかない][他の施設の状況から老健が受け皿になるしかない]と理解し、そのことを通じて【老健で受けるしかない】という覚悟を持つに至ることが明らかとなった。

《老健施設の看取り体制の評価》の肯定的な内容として、【確かなサポート体制】があり、その一つには[看護師が常駐している安心感]があった。小野ら¹⁶⁾の研究においても、看取りを行う介護職にとって看護師の存在は心強いと報告されており、共通する結果が得られている。また、カンファレンスやユニット会議など[スタッフ間で情報を共有する場所がある]があげられていた。看取りケアの方法などの情報交換や経験を共有する機会があることも、介護福祉士が看取りケアを行ううえで重要なサポート体制であることが示唆された。このような【確かなサポート体制】がある一方で、[寄り添うことができない人員体制]というマイナスの評価もみられた。人員体制の制約によって、看取りケアが必要な利用者やその家族にできるだけ寄り添いたいと思っても、日常業務に追われて十分な看取りができないジレンマに直面していることが示唆されている。

以上のように、看取りに伴う介護福祉士の環境に対する評価に加えて、自らの看取りに対して《経験主義的なケアへの確信と不信》といった評価もみられた。介護職員は終末期ケアに不安や恐怖を感じているが、看取り経験を通じて不安や恐怖が薄らいでいくことが先行研究で明らかとなっている²⁷⁾。本研究においても、急変時には医療的な対応を必要とすることが多い一方で、看取りは穏やかで心構えができると語っているように、経験を通じて急変と看取りとの違いを理解できるようになり、[体験することでの看取りへの理解]を深めていることが示唆された。しかし、自らの経験のみに依拠した看取りであることから、【確信できない経験的なケア】としての意識も併せて芽生えさせていた。

利用者の家族が、老健を最期の場所として選択したことで、このことが介護福祉士にとって[家族からの信頼感を実感]するとともに、慣れたところでこそ[利用者が安楽に最期を迎えられる]といった意味付けに繋がっていた。つまり、看取りを実践することで、有用感を感じることができていた。このことは、原ら⁷⁾や小野ら¹⁶⁾が報告していることと同様の結果であった。既述のように、このような有用感を得ることができたのは、[看護師が常駐している安心感]と[スタッフ間で情報を共有する場所がある]といった【確かなサポート体制】、[体験することでの看取りへの理解]と[経験することで必要なケアを理解する]という【経験の中で培われた技能への自信】があったからこそである。しかし、介護福祉士は有用感のみを感じていたのではない。[ケアへの不安]を併せて抱いていた。本研究では、[寄り添うことができない人員体制]によって十分な看取りができなかったという不満足感、そして、【確信できない経験的なケア】という自らの経験だけに基づく看取り実践も、[ケアへの不安]へと結びついていることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 内閣府：平成 25 年版 高齢社会白書.
- 2) 厚生労働省：平成 24 年度診療報酬改定の概要その 2,
http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryuhoken/iryuhoken15/dl/h24_01-02-2.pdf,2013.3.22.
- 3) 全国老人保健施設協会：平成 24 年版 介護白書.
- 4) 全国老人保健施設協会：介護老人保健施設が持つ機能の一環としての看取りのあり方に関する調査研究事業報告書,2012.
- 5) 厚生労働省：人口動態統計「死亡の場所別にみた死亡数・構成割合の年次推移」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii10/>,2013.4.5.
- 6) 高野恵子・落合利香：介護福祉士養成に係る「ターミナルケア」導入の取り組み,甲子園短期大学紀要 30,47-53,2012.
- 7) 原祥子・小野光美・大畑政子・岩郷しのぶ・沼本教子：介護老人保健施設におけるケアスタッフの看取りへのかかわりと揺らぎ,日本看護研究学会雑誌 33(1),141-149,2010.
- 10) 平松万由子・大淵律子・北川亜希子：介護老人保健施設における終末期ケアに関する実態調査,三重看護学誌,13,147-154,2011.
- 11) 梅津美香・小野幸子：介護保険施設の看護職者の施設内死亡に対する意識,老年看護学 17(1),119-127,2002.
- 12) 流石ゆり子・牛田貴子・亀山直子・鶴田ゆかり：高齢者の終末期ケアの現状と課題－介護保険施設に勤務する看護職への調査から－,老年看護学 11(1),70-78,2006.
- 13) 原祥子・小野幸子・坂田直美・梅津美香：介護老人保健施設における死の看取りを含むターミナルケアへの組織的取り組み－2 施設の看護管理者の面接調査より－,老年看護学 8(1),86-94,2003.
- 14) 清水みどり：介護老人保健施設での死の看取りを可能にする要因の考察－看護管理者へのインタビューから－,新潟青陵大学紀要第 5 号,347-358,2005.
- 16) 小野光美・原祥子：介護老人保健施設における看取りケアに携わる介護職員の体験,鳥取大学医学部紀要 34,7-16,2011.
- 18) 渡辺みどり・千葉真弓・細田江美・松澤有夏・曾根千賀子：介護老人福祉施設における認知症高齢者の終末期ケアの困難とケア方法－施設内での看取り割合による比較－,日本看護福祉学会誌 15(2),99-110,2010.
- 22) 出村早苗・中村房代：特別養護老人ホームのターミナルケアにおける介護福祉士の役割－悩みと施設体制の関連から－,文京学院大学人間学研究紀要 coi.13,219-236,2012.
- 26) 南部登志江・林田やよい：介護老人福祉施設におけるターミナルケアの実態と介護職員の思い,インターナショナル Nursing Care Research 8(4),79-88,2009.
- 27) 深澤圭子・高岡哲子：福祉施設における終末期高齢者の看取りに関する職員の思い,北海道文教大学研究紀要第 35 号,49-56,2011.
- 28) 日本老年医学会：「高齢者の終末期の医療およびケア」に関する日本老年医学会の「立場表明」,日本老年医学会雑誌,38(4),582-583,2001.
- 32) 中村陽子：“Disability”をもつ入所者ケアにおける看護師・介護職員の認知,福井大学医学部研究雑誌第 13 巻 第 1 号・第 2 号合併号,1-17,2012.
- 33) 日本看護協会：平成 24 年度 高齢者ケア施設で働く看護職員の实態調査報告書,2013.